

加工・販売部門を導入したイチゴ狩り観光農園

～採れたてイチゴで作ったスイーツはいかが～

南知多町 石川雅巳（いしかわまさみ）さん
施設イチゴ

【平成23年10月20日掲載】

知多半島ではイチゴ狩りができる観光農園が増えており、現在では約40戸のイチゴ生産者の概ね3分の1が観光農園を取り入れた経営を行っています。

そんな中、南知多町で採れたてイチゴのケーキを味わうことができるカフェを併設した観光農園を運営する、農業生産法人（株）フラゴラ代表取締役である石川雅巳さん（写真1）を紹介します。



写真1 石川雅巳さん

1 イチゴ狩りとカフェ&ケーキ屋さん

まさに丘の上に立つ観光農園「いちごの丘」は、自然豊かな南知多町にあり、外観は欧風のたたずまいで、カフェスペースからは海を眺めることができます。

「いちごの丘」内のカフェ&ケーキ屋さん（写真2）では、採れたてイチゴを使用した、いちごロールやタルト（写真3）が大好評で、シーズン中は焼き上がり時間にあわせて、お客さんが多数買い求め、即座に売り切れるそうです。カフェ&ケーキさんの営業期間は、イチゴ狩り期間と同じ12月初旬から5月下旬頃となっています。



写真2 カフェ&ケーキ屋さん

2 「いちごの里」を開園

石川さんは新規参入者であり、以前は体験型レジャー施設の業務に携わっていました。観光農園を選んだのは、それまでの経験を一番活かせると思ったからです。

平成13年12月に、南知多町内に観光農園「いちごの里」を30aの規模でオープンしました。品種は酸味が少なく甘味が強い、大粒の「章姫」です。



写真3 いちごロールとタルト

初めてイチゴを栽培する石川さんは、イチゴ高設栽培システムメーカーの栽培指導を受け、順調に生産することができ、農園を運営することができました。翌年には経営規模を60aに拡大し、平成15年には町内の別の場所に20aの直売用イチゴ専用ハウスを建設するとともに、雇用労力を周年利用するため、それまでの購入苗から自家育苗に切り替えました。

3 「いちごの丘」のオープン

平成18年、南知多の海が見える丘の上に新たな観光農園「いちごの丘」を45aの規模でオープンし、「いちごの里」等を含めた全体の経営規模は125aになりました。(写真4、5)。

また新たな顧客層を獲得するため、平成19年、加工販売部門としてカフェ&ケーキ屋さんを「いちごの丘」内に立ち上げました。

それに伴い、ケーキ担当の従業員を1名増やし、それまでのイチゴ生産担当3名と併せ、計4名の従業員と、シーズン中、最大26名のパートにより運営しています。

なお、平成21年には農業生産法人(株)フラワーを設立して両園を法人化し、運営を行っています。

4 イチゴの高品質生産に向けて

自家育苗に切り替えてからは、125aという大規模なほ場の運営に必要な苗数の確保に苦労するようになりました。特に8月は高温により炭そ病が発生し苗に大きな影響を及ぼすので、適切な養液管理と薬剤使用による被害の低減や、発病株の速やかな処分などの対策を行っています。また石川さんは、知多半島内で高設栽培システムを用いてイチゴの育苗・生産に取り組む生産者で組織する「知多イチゴロックウール研究会」に所属しており、積極的に情報交換を行い自己研鑽することで、農園に訪れるお客さんに満足してもらえるような質の高いイチゴ生産に尽力されています。

5 地域全体でイチゴ狩り農園の活性化を

将来の経営についてお聞きしたところ、「知多半島全体でイチゴ狩り農園が盛り上がるようにしていきたい。また農園の多くは半田市周辺にあるので、美浜町、南知多町でも増えて欲しい。」と語られました。また「来客数を増やすための方法としては、第1に現在の営業期間(概ね12月から5月)を他作物の導入により通年営業化する方法、第2に農園やカフェの店舗数を増やす方法、第3にお客さんの滞在時間を長くするためレジャー施設を導入する方法が考えられる。今はまだ方向性がみえてこないが、まわりの動向を見極めながら検討していきたい」と真剣なまなざしで語られました。



写真4 イチゴ生産施設



写真5 イチゴ生産の様子

執筆：農業経営課

取材協力：知多農林水産事務所農業改良普及課